

抗日パルチザン参加者たちの回想記

訳 鈴木 武

死に打ち勝ったチョチャンヂユ（6巻4話）

ペク・ハンリム

3

いつでも革命的警戒心を高めなければならない（10巻13話）

キム・デホン

19

敵を瓦解させて（6巻14話）

チェ・ヒヨン

29

死に打ち勝ったチヨチャンヂユ（車廠子）（第6巻第4話）

ペク・ハンリム

革命の道は艱苦である。その路程は平坦な大路での安逸な歩みではない。

敵との決死的な闘争、飢えと寒さ、経済的難局の克服、敵のあらゆる悪辣で陰險な暗害策動の粉碎なしには革命の前進はありえない。

連続して押し寄せてくる力に余る難関と峻厳な試練の波濤を真つ向から打ち碎き乗り越えてこそ革命の勝利を得ることができよう。

我々は実にどれほど多くの波乱曲折を経て輝かしい今日に至ったか！

誰しも自分の過ぎ去った生活における艱苦だった時期を忘れることはできない。

私は今日の幸福を考えるたびに、キム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争時期のチヨチャンヂユでの苦難に満ちた闘争と生活を振り返ってみようになる。

敵によつてもたらされた惨禍の中でも餓えの中でも革命の勝利を鉄石のように固く信じながら不死鳥のように闘ったチヨチャンヂユ人民にとっては、生活そのものが敵との決死戦だ

った。

アンド（安凶） 県チヨチャンヂュ遊撃根拠地はペクトウ（白頭）の太古然とした密林に囲まれた、人跡まれな地方で、敵が〈討伐〉するには不利で、我が軍が防御するには比較的有利な地帯だった。

チヨチャンヂュ根拠地は東満の多くの地方根拠地よりずっと遅い一九三五年初めに至って創設された。根拠地に対する日帝軍警の〈討伐〉が甚だしくなり、根拠地封鎖政策が強化される条件の下で、飢えと血みどろの闘争の動乱の中で苦しめられていた人民が、敵〈討伐隊〉の発狂的な殺人蛮行を避けてここに集結して新たな根拠地が創設されたのだった。

こうしてここにはフェアリオン、ヨンギルの遊撃根拠地から来たたくさんの革命大衆が住んでいた。

彼らはすでにここに移ってくる前にフェアリオン、ヨンギル県の各根拠地で艱苦な困難を経たきた人たちだった。

彼らは再び暮らしを立てた。谷間には人民革命政府機関や学校、病院、兵舎、人民が暮らす丸木小屋ができた。

当時私はここで組織された反日自衛隊に属していた。

武装して根拠地を保衛する任務を負った反日自衛隊員たちは、毎日のように警戒勤務に立ち、軍事訓練と政治学習を進めた。

搾取と抑圧のない我等の世！本当に力が湧き、生きている気がした。

皆が生甲斐と信念にあふれていた。

人民革命政府の施策は人民に対する愛情と配慮にあふれ、我々の幸福を用意してくれた。女性、壮年、老人の誰を問わず皆自身が自身の運命の主人となって働いた。

人民革命政府は彼らと生死苦楽をもにしながら、彼らに与えることのできる全てのものを与えながら温かく懐に抱き支えてやった。

少年たちが丸木小屋の学校で黒い瞳を輝かせながらノートにさっさと我々の文字を書く光景は、全てのチョチャンヂュの人たちの最も大きな幸福の象徴だった。

しかしその幸福を守るといことはたやすいことではなかった。

チョチャンヂュの人たちは敵と熾烈に闘わなければならなかった。敵は根拠地を封鎖する一方、なんとしてでも根拠地を奪おうと発狂的に襲いかかってきた。

このような条件の下で食糧、被服などの必需品を解決するということは並大抵の困難ではなかった。一合の食糧を手に入れてくるのにも血を流さなければならなかった。

敵〈討伐隊〉は日が経つほどいつそう凶暴に襲いかかってきた。そのために根拠地の全ての人たちはいつも戦闘的動員態勢を緩めることはできず、有事の際には命をかけて根拠地を守らなければならなかった。

難関は一つや二つではなかった。密林の中に位置するチョチャンヂュはあまりにも不毛な

地域だった。

何しろ一着きりの麻服をまとい、素手のほかには何も無い人民にとって冬は最も困難な時節だった。

穀粒も、草も、塩もなかった。飢えは容赦なく人々を倒し始めた。

人民は大小の鎌や刃物を持って寒さに震えながら山に登り、力の及ぶ限り松の皮をはいで食べ始めた。日が経つほど皮をはがれた真つ白い松が増えていき、しまいには樹林全体が凄惨な姿になった。

そうかと思えば男女老少が凍った手で深く積もった雪の下をかき分けて古くなった草の根や乾いた山葡萄の芽やじゃがいものつるなどを掘り出して塩もなく煮て食べた。

このようなものを食べる時にはのどがぐつと詰まるようで、のどから血が出てきた。しかしそれさえ十分になくて食べられない状態だった。

若い人たちはこのような惨状を座して見ていることができず、食糧を求めに出かけた。我々武装自衛隊員も死線をくぐり抜けて敵の食糧をいくらかずつる獲ってきたりした。

しかしそれではたぐさんの人たちが口に糊するのに足りなかった。こうして食糧を分配する時にはまるで薬剤師が薬を取り出すように小さなさじで手のひらに分けてやった。実に穀粒一粒が金の塊のように貴かった。

塩がなくて体がむくみ始め、髪の毛の生え際が裂け、足がふらつき始めた。

実に形容しがたい身の毛のよだつような生活が日と月をつないでいった。

しかし誰も困境に勝てずに生命を自ら無にすることはしなかった。困境になるほど日本帝國主義者に対する憎悪と復讐心に燃え、齒を食いしばって立ち上がった。

フアリョン県から来たある老人は腹をすかせて横になった妻子たちに煮た松の皮を出しながら言った。

「起きなさい！日本の奴らを滅殺する前にわしらが倒れてどうする？土を食べてでも生きなければならぬ。さつさと起きなさい！」

この言葉に横になっていた妻子たちが一人一人起き上がった。

全ての人々が互いに鼓舞し援護した。体の丈夫な人たちは何とかして食べるものを用意しては家々を訪ねて回りながら分けてやった。

「兄さん、元気を出してください！」

「遊撃隊がまた敵をやっつけたそうですよ。起きてください！」

「生きてウエノムを一人でもやっつけなくちゃならないじゃないですか！」

人々は互いに会えばこのように挨拶をした。

誰も百倍千倍に敵に報復しなくては、たとえ千丈の崖から転げ落ちることがあろうとも死んではならないということをあまりにもよく知っていた。これは闘争と未来に対する自覚であり、革命に対する熱望だった。

冬の一、二ヶ月は十年に相当するほどのうんざりするような長さで流れていった。いつの間にか気候が和らぎ、日差しが強くなってきた。

チヨチャンヂユの空に飛んでくる季節鳥たちと草木をかすめて吹いてくる暖かい風はうれしい春の消息を知らせてくれた。

しかし人々はあれほど待っていた春を立って迎える力がなかった。横たわって涙に潤む目で春を迎えた。

政府では穀物を植えなさいとじやがいても、とうもろこし、そば、粟、きびなどのいくらかの種穀を分けてやった。

しかし以前には「農民は死んでも種穀は刈って死ぬ。」ということわざを真実のものとしてそらんじてきた人民が、今ではもう我慢できずに種穀をこっそり食べてしまう現象が現れた。すでに苦しい体が意思の言うことを聞かなくなったのである。

そこで革命組織と政府で働く人たちは家々を回りながら、種穀を食べないように説得しなければならなかった。

人々は互いに励ましあい頼りあいながらのろい足取りで種をまきに出かけた。立てない人たちは這って畑に出た。

悪戦苦闘の中で一寸、二寸と地面は掘り起こされ、一粒、二粒と種がまかれた。

ところが一夜明けしてみると種をまいた畑がすっかり掘り返されるといふ思いがけないこと

が發生した。

しかし人民は再び種をまいた。すると再び掘り返されるといふことが起こった。

後に判明した事実だが、その当時隊列内に潜入した反革命分子たちは農事を台無しにすることによつて人民を飢え死にさせようと策動したのだつた。

奴らは遊撃隊が遠征に出発する時に、人民の生命を保護するようにと与えていった少なからぬアヘンを売つて食糧を買つてこようとはせず、故意的に人民を飢え死にさせようとした。

こうして人民は避ける道のない飢えと闘いながら、同時に隠れた敵と血みどろの激闘をしなければならなかつた。

この艱苦な戦いで結局勝利したのは人民だつた。

種をまいた穀物はとうとう芽が出始めた。

一見その芽は種から出たようであつても、人民が流した血と汗から、そして涙から出たものに違いなかつた。

日が経つほど飢餓はひどい伝染病のように無慈悲にたくさんの方々の生命を奪つていった。

しかし人々は生命のための決死戦から退かなかつた。

チヨチャンヂユの山と野は草をむしる人々で満ち溢れた。

春のひざしがだんだん強まるにつれてワラビ、オケラ、オタカラコウ、ソンゴンナムル、

トラジ（キキヨウの根）、アマドコロ、ユリ、ムスエ、ノルナムルなどのさまざまな山菜で食事を続けた。

さらにはかえるの卵までためらいなく食べたし、だめになった（トログ）（冬用の皮の履物）まで煮て食べなければならぬ有様だった。

このような日々にも自衛隊は哨所を離れなかった。

我々はずつと塩一粒なく草ばかり食べながら銃を握って歩哨に立った。

足がふらつき、全身が水に濡れた綿の塊のように力がなかった。目の前には間断なく火花が渦巻き、時折空と地面が逆さに見えたりした。

このような時には銃を握ったまま力なくその場にひっくり返ったりした。しかし再び起き上がった。

生きても死んでも革命を、人民を守らなければならなかった。生に対する放棄は変節であり、利己主義は反革命のように有害だった。

我々はただ意志の力で立つことができたし、人民に対する服務と愛情の精神で目を開け、歩みを移すことができたし、また銃を撃つことができた。

このような時我々にとって比較的ましな食糧はセスレとシラカバだった。

水が上がるセスレやシラカバを１メートルぐらい皮をはいでからその下に器を当ててしばらく置くと、井一杯ほどの水がたまる。その水を飲むと気持ちがさっぱりして多少とも力が

湧いた。

このような困難な日々にも敵の〈討伐隊〉が襲撃してくれば、根拠地を保衛していた遊撃隊員たちと自衛隊員たちは勇氣百倍で敵との決死戦に立ち上がった。人民もある限りの力を尽くして我々を助けた。

チヨチャンヂユの遊撃隊と人民はただ革命的熱情と鋼鉄のように固い団結の力で、優勢な武装を持った敵を打ちのめすことができた。

しかし敵の大部隊が不意に襲撃してきた時にはやむを得ず根拠地の一部を放棄していったん皆山に登ってから反撃せざるを得なかった。そのような時には敵は根拠地の施設物を破壊し、火を放って逃げた。

すると人民は辛抱強く燃えた跡に再び丸木小屋を建てた。

このようなことは実に数え切れないほど反復された。

「敵どもめ、お前たちが勝つか、我々が勝つか勝負してみよう！」

「奴らのために家を建てる腕が上がるぞ！」

人々はこのように言いながら再び丸木小屋を建てた。

敵は根拠地の家を燃やすことはできても、その中にこめられた革命的人民の固い意志までなくすことはできなかった。ここにまさにチヨチャンヂユ人民の不屈の力があつた。これは未来を愛し、幸福とはどんなものかを知る人々の力がどんなに強いものかをはつきりと見せ

てくれた。

難関が厳しいほど大衆に対する政治活動は非常に重要だった。

幹部たちは麦の穂が出る前には、麦の茎を持って家々を回りながら、やがて穂が出てくるから難関に勝とうと鼓舞した。

麦の穂が出てきた時には、その新穂を持って回りながら、やがて新穀ができるから失望してはいけないと互いに力を培ってやった。

人民はすきつ腹を抱えながら実に超人的な忍耐力で難関と闘っていった。

畑には草が茂った。人民は再び畑に這い出て、手の先から血が出るほど雑草を取った。たとえホミ（草取り鎌）があっても持つ力がなかった。

雑草を取るうちにその場で息を引き取る人も少なくなかった。

しかし生き残った人たちは彼らを埋める力がなかった。一握り、二握り土を集めて、復讐の涙、恨みの涙で濡らしながらその死体を埋めた。

むしって食べる草までなくなつた。生き残った人たちの最後の生命まで危険になった。しかし誰一人根拠地を離れようとしなかった。根拠地は生の家であり、闘争のゆりかごだった。

たった一日を生きるのでも自らの主権と遊撃隊の保護の下に生きているという幸福感がそのような不屈の力を生んだ。彼らは根拠地生活を通じて幸福とは何かをはつきりと知っていたために、その幸福から少しも退くことはなかった。

四肢がなくなれば胸で、胸がなくなれば齒でも守らなければならぬ根拠地だった。人民は敵に家産を略奪され、家族を失って裸一貫になった人たちだった。多くの人々がまた遊撃隊の家族たちだった。

だから革命と遊撃隊は彼らの第一の生命だったし、生の甲斐もそこに求めた。

「革命のために最後まで生きよう!」、「どんなことがあっても遊撃隊が来るまで待とう!」、「死んでも革命のために」——人民はこのような革命的志操を整え鼓舞しながら互いに肩につかまりあつて草を摘みに行き、一粒の塩も分けて食べながら根拠地を死守した。ついに新穀を食べることができるようになった。

この新穀を食べながら、犠牲になった人たちのことを思つて涙を流さない人などは一人もいなかった。

このころに遠くに出かけて活動していた遊撃隊が帰ってきた。遊撃隊員たちを抱きしめる人民は言葉よりも涙が先に立った。

ある遊撃隊員は自分の母親がいた家に走つていった。しかし母親はすでに世を去つていた。誰かが泣きながら彼に言った。

「お母さんはいつもあんたを待ちながら言つていたよ——へ私はただ米ひとさじさえ食べれば息子が帰つて来るまで生きられそうだけど」つてね。でもお母さんはその願いさえかなわなかつたんだよ。……」

この話を聞いた遊撃隊員は悲憤に打ち震えた。彼の手から小さな巾着が落ちた。それは米の巾着だった。

彼は行軍や戦闘の時に胸をえぐるような飢えをこらえながらもその米を大事にしまっておいたのだった。

遊撃隊員たちは人民の前代未聞の英雄主義に感激しながらも、このような惨状をもたらしたのにはある誤った者たちの悪行が隠れていることを看破した。

惨状をもたらした原因を探るために遊撃隊と人民は会議を持った。

問題がだんだん明白になるや、隊列内に潜んでいた反革命宗派分子たちは逃げてしまった。我々はその時隊内の敵がどんなに革命に危険であるかをはっきりと感じ、革命隊伍と組織大衆の純潔性のために皆が警戒心を高めて闘争しなければならないということを胸にしみて感じた。

遊撃隊が帰ってきた後根拠地は再び活気を帯びてよみがえった。

女性たちは山菜を掘ってくるとおいしいものは遊撃隊員たちに与えようと別に集めてよもぎ餅、松皮餅（松の内皮をうるちの粉に混ぜて作った餅）を作っては自分たちは食わずに必死になって遊撃隊員たちに勧めた。さらには少年たちまでチョコチャンヂュを挟んで流れるコドン河で魚やかえるを捕まえては自分たちは腹ペこで倒れながらもそれを戦闘から帰ってくる遊撃隊員たちのために残しておいた。

彼らは草をむしりながらも遊撃隊員たちを慰労しようと演芸種目を準備した。

ある日の夜児童団員たちは遊撃隊員たちの前で演芸公演を行った。

素朴な舞台の上で大勢の少年たちが踊りながら〈総動員歌〉を歌った。

この時一人の少年がめまいを起こしてそのまま舞台の上で倒れた。

歌は止んだ。

全ての観衆が立ち上がった。一人の遊撃隊員が舞台に飛び上がって少年を抱きかかえた。

すると少年は再び細かいのどに力を込めて声の限り歌を歌った。

来たぞ来たぞ革命が来たぞ

革命の氣勢は全世界を覆った。

金のない労働者は槌をかついで出でよ

土地のない農民は鎌をかついで出でよ

全ての人々は涙を流しながら少年たちの歌声に合わせた。涙の混じった〈総動員歌〉はチ

ヨチャンヂュの夜空を揺るがした。

遊撃隊員たちもやはり人民の食糧を解決するために決死的に闘争した。

彼らは生命と食糧を引き換えてきて自分たちは腹をへらしながらも人民に食糧を分けてやった。たくさんの人々の食糧を解決するということは並大抵のことではなかった。

遊撃隊と人民との鉄石のように固い団結でチヨチャンヂュは生きて息をつき、忍び寄る敵

を打ち退けながら自己の権利と自由を守護した。

敵の〈討伐〉はいっそう激しくなり、奴らはだんだん更なる大部隊で押し寄せてきていっそう凶暴に襲いかかってきた。さらには飛行機まで動員して爆撃した。

実に死活的な時期だった。しかしチョチャンヂュの遊撃隊員たちと人民は屈しなかった。息絶えることがあるうとも根拠地を必ず守ろうという非常な熱情で沸き立った。

チョチャンヂュの遊撃隊員たちと自衛隊員たちは一人が十人、百人の敵を引きうけて闘わなければならなかった。

実に形容のできない艱苦な戦いだった。弾がなくなれば炸弾で、炸弾がなくなれば銃剣と銃台で肉弾となって敵を殴り倒した。

このような時には安全な地帯に身を避けていた人々まで助けに出てきた。

岩を転がす人たち、負傷したトンムたちを背負って運ぶ老人たち、実にチョチャンヂュの木一本、草一株まで敵を倒して闘った。

チョチャンヂュはこのように決死戦に立ち上がって敵を打ち破った。飢えの中で、寒さの中で、敵の銃剣の林の中で、敵との絶え間ない闘争の中でも光明の未来を信ずるチョチャンヂュの人民は生きていたし、血にまみれた革命の旗を高く高く掲げた。

一九三五年九月上部から遊撃区域の人民を解散させることについての指示が下達された。新たに生じた革命情勢は、狭い遊撃区域に人民を集結させて敵の集中攻撃を受けるのではな

く、遊撃根拠地を解散して遊撃闘争をもっと広い地域にわたって機動的に展開することを要求した。

会議が重ねて開かれた。それは人民が根拠地から、そして遊撃隊のそばから必死に離れまいとしたからだだった。

革命政府の働き手たちと遊撃隊の指揮官たちは人民を重ねて説得し解説した。

しかし大部分の人民はこみ上げる涙を飲み下すばかりで、なかなか応じなかった。

ヨンギルから来たある老人は泣きながら言った。

「どうして敵統治区域に下りていきましょー！ 私は敵によって五人の家族を失った身です……到底ここを離れられません。ここでは草を食べてでも我等の世の中でした。

我等の主権は私に土地までくれました！ 老いた身で我等の文字まで学びました。本当に生きていくようでした！……それなのにどうしてここを……離れろというのですか？……」

これがどうしてこの老人一人の心情だったろうか！ 誰も生と闘争の揺籃であるチョチャンヂュから離れるのをつらかった。

彼らには実際敵統治区域に下りていくほかに道はなかった。しかし敵は人間ではなく狼だということあまりにもよく知っている彼らは、今度は遊撃隊についていくと哀願した。

しかしこれも不可能なことだった。

身を支えることもよくできない彼らが、山野を走り回る遊撃隊にどうしてついていくこと

ができようか？！

長い説得の末にやっと人民は敵統治区域に、いくらかの人たちはもつと深い山中に、一部の若い人たちは遊撃隊についていくことになった。

「骨が碎けて粉になることがあろうとも革命のために生きます！」これは敵統治区域に出発する人民が何度も遊撃隊員たちを振り返って涙を流しながら言った言葉だった。

このようにチヨチャンヂユの人民は屈しなかった。このようにチヨチャンヂユの人民は不死神のように闘った。

今も静かに目を閉じて回想すれば、チヨチャンヂユの赤い心臓たちが赤々と燃え上がらせた革命の火が見えるようである。その火は今日の温かい幸福を用意してくれたし、これからも永遠に熱く燃え続けるだろう。

☆

いつだって革命的警戒心を高めなければならない（第10巻第13話）

キム・デホン

かつての抗日武装闘争時期にキム・イルソン同志は我々遊撃隊員に常にこのように教えられた。

：遊撃隊員はいつでも革命的警戒心を堅持しなければならない。敵は我が遊撃隊を内
部から破壊するために悪辣に策動しているのではなさらない。

革命的警戒心は敵の策動を適時に摘発することで表現されなければならない。敵が悪事をな
すまで我々がそれに気付かないでいるならば、革命にどれほど大きな損失を与えることか。

：

我々はキム・イルソン同志の言葉を肝に銘じて、どんなに困難で複雑な環境に処した時
も、抗日遊撃隊伍を害そうとするあらゆる階級的敵の狡猾で悪辣な策動を適時に摘発粉砕し
た。

いかなる仮面をかぶった敵であろうとも、キム・イルソン同志の革命思想で確固として武

装した我々遊撃隊員の鋭い洞察力の前では自己の醜い正体をさらけ出してしまった。

一九三八年の早春だった。

北滿一帯で活動していた我が部隊は、ある樹林の中に数日間留まっていたことがあった。

その時指揮部では今後予想された新たな作戦を準備するために、長い行軍で疲れた隊員たちに休息するよう命令した。

隊員たちは皆天幕を張ったり、薪を切ってきたりしながら宿営準備を急いだ。

私も新入隊員の一人と一緒に薪を切ってくる仕事をやるようになった。

この新入隊員は我が部隊がリヨンムン地方のある部落にいた自衛団の奴らを攻撃してその村を解放した時に入隊した青年だった。

我々がここの人民に自衛団の奴らに奪われた食糧、被服などさまざまな物資を分けてやって村を出発しようとした時だった。

我々を熱い気持ちで見送ってくれる人民の中に混じっていたこの青年が遊撃隊に入隊させてくれと熱烈に請願してきた。

彼は日雇い労働者として流れ歩きながら苦勞するよりもいつそ遊撃隊に入隊したいと強硬に提起した。

このようにして入隊したこの青年のその後の生活では別に変わったところはなかった。

むしろトンムたちの中で評判は良かった。彼は疲れているトンムたちのために骨の折れる

仕事を自ら進んで引き受け、宿営地に到着しても自ら進んで炊事隊員たちの仕事を手伝い、水を汲んできたり、焚き火を起こす薪を取ってきたりした。

私はこのような点についてすでに知っていたので、少なからぬ期待を持ってこの日彼と一緒に薪を切る仕事に取り掛かった。ところがしばらく仕事をしながら見ると、彼の仕事ぶりは全く気に入らなかつた。

彼は頑張っているようにみえても、斧で木を伐る腕前は初めてやってみるみたいに全く下手だった。

一、二回で伐れる木も斧が的中せずは何べんも叩いてやつと切り倒した。

私は見るに見かねて一言面と向かつて言つてやつた。

「何て奴だ。斧の柄をしっかりと握つてまっすぐ打ち込めよ。一発で伐れるじゃないか。」

この言葉に彼は自分がやっていることを私が見守っているのだと察して必死になったようだったが、出来映えは一緒だった。

（農家で育つて作男暮らしまでしたトムムならば薪を伐るぐらい簡単にできるはずなのに、なぜこんなに下手なのか？）

私は心の中でひそかに彼に対して気に食わなく思ったが、遊撃隊生活を初めてするトムムなのだから仕事の手につかないこともありうると考え直した。

こんなことがあつて以後、彼と一緒に生活しながら私の疑心はだんだん深まつていった。

彼は行軍しながらも何ら必要もないその地名をしきりに尋ねてみたり、木や草株のようなものも折ったりこすったりした。

そして入隊していくらも経たないトナムたちや若い女性隊員に会うと、ひそかに遊撃隊生活は思っていたのとは違うとか、強大な日帝に打ち勝とうと思えば普通の力をもってしては困難だなどと言葉をかけて相手の気持ちを探ろうとした。

特に彼の武器を扱う腕前が人並みはずれていることに対して私はいつそう驚かざるを得なかった。

当時の経験によれば、地方で農業をしていて入ってきた農民出身の新入隊員が武器の取り扱いに巧みになろうとすれば、どんなに熱心にやっても一定の期間熟練しなければならなかった。

ところがこの新入隊員は銃を手に握った日から十日ほど経つと、どんな武器でも手当たり次第に非常に巧みに扱った。そればかりでなく武器の構造、名称、作用までも非常によく知っていた。

入隊当初は銃を見て生まれて初めて見るもののようにいじっていたこの隊員が、わずか数日のうちにこんなに巧みに扱うということは驚くべきことだった。

私はこれにはきつと何か訳があると思つた。

我々は警戒心をいつそう高めた。

そうでなくても当時我々は敵の狡猾で陰凶な策動に対してよく知っていたばかりでなく、そこから深刻な教訓を見出したこともあった。

それは我が部隊がタンウオン地方で活動していた時だった。

ある日の夕方我々は深い樹林の中で猟師たちが住む山小屋を一軒発見した。

部隊の指揮部では隊員たちを派遣して山小屋を詳しく偵察したが、別に変わった点はなかった。行軍過程の疲れをほぐし、万端の戦闘準備を整えるためにそこで休息することにした。

隊員たちは食事の準備に追われた。

その日の夕食には特別にマンドゥ（朝鮮式餃子）を作ることにしたので、人手がちよつと足りなかった。

そこで山小屋の人たちも水を汲んだり火を焚いたりして我々の食事の準備を積極的に手伝った。

すでにできあがったマンドゥからは湯気がほかほか立って香ばしい匂いが漂った。

猫が一匹この匂いにやきもきして飛び回った。

その猫はマンドゥをくわえていこうと機会をうかがいながらそろりと忍び寄った。

私は何度も猫を追い払った。その一瞬私の頭の中には、先日先行していた部隊が敵と遭遇戦をするようになった事実を挙げて、警戒心を高めるようにと言った指揮官の言葉が稲妻の

ようにひらめいた。

私は猫を利用して検食してみようと思い、マンドゥを一個猫の前に投げてやった。ところが猫はそれを食べるとしばらくして倒れて死んでしまった。

この事実を端緒にして我々は、山小屋に猟師に変装して潜入していた日帝の間諜を摘発した。

敵の間諜は先行していた部隊の行動を日帝の奴らに密告したばかりでなく、今度も我々を助けるふりをしながら水に毒薬を入れたのだった。

我々はそいつの罪行を一つ一つ明らかにしてから即時に処断してしまった。

このように奸悪で狡猾な敵の策動を数限りなく経験しながら、そのたびに鋭い分析と判断力で白黒をつけてきた我々が、正体の分からぬ一人の青年の怪しい挙動に対してそのまま見過ごすはずはなかった。

私はそいつの行動と発言に現れた具体的な資料を指揮部に報告した。

指揮部ではすでに全ての事実を知っており、他の隊員たちも私と全く同じ考えをしていた。当時敵は遊撃隊伍を内部から破壊するために数多くの間諜、破壊、暗害分子を派遣したが、その形態はさまざまだった。

それは遊撃隊に対する簡単な資料を収集したり、破壊、暗殺を目的にして入ってくる奴らと、一定の期間潜入しながら広範な地域の秘密を探り出して逃走する奴らもいた。

また長い期間潜んでいながら秘密を探知するばかりでなく、さらには指揮官の地位まで狙って潜入してくる者たちもいた。

我々はこのような敵の策動を見抜きながら、正体の分からぬこの青年に対して警戒心をいっそう高めた。

そんなある日だった。

指揮部の命令を受けて私はその新入隊員と一緒に隣接部隊に通信連絡に行くことになった。その時私は拳銃を携帯し、その新入隊員は歩銃を担いだ。

数十年経つ高木がびっしりと生い茂ったうっそうとした山林の中を黙々と歩いていく私の心は実に複雑だった。

—こいつは本当に日帝の奴らが派遣した密偵だろうか？ そうだとすればこいつは部隊と離れたこの山林の中でどのように行動するだろうか？—

しかし私は心を鎮めて前に立って大股に歩いていった。

私がある尾根に登った時、後ろから息を弾ませながらついてきたその新入隊員は、ここはどのあたりで、ここから集団部落まではどれくらい遠いかと訊くのだった。

—こいつは本当に？…—

私かこいつの内心を探り出すために、わざと拳銃をはずして上着と一緒に肩にひょいと担いで数歩先に立って歩いた。

いつのまにか山林の中は暗闇に包まれ始めた。

ある山の曲がり角を回った時だった。

新入隊員が不意に飛びかかってきて私の銃をひったくった。

「何の真似だ？」

私はこのようにかつと声を張り上げながらそいつの前に近づいた。

そいつは本性を露骨に現して飛びかかってきた。

私は慌てることなくどんな場合でもそいつの攻撃をはねのけることができるように準備態勢を整えていた。

私が慌てた様子もなく泰然としているのを見るや、そいつは私から奪った拳銃を私の胸につきつけて引き金を引こうとした。

この時私は腰から小型拳銃を引き抜いた。

「こいつめ！ 本物の弾を受けてみる。」

瞬間そいつは必死に銃を撃とうと繰り返し引き金を引いたが、弾は出なかった。

私が携帯していた拳銃には火薬のない弾があるだけだった。

自分の正体が暴露されたばかりか、袋小路に陥ったことを悟ったそいつは、死を顧みず逃走しようとした。

我々はいいつを逮捕し、必要な資料を探り出してから処断してしまった。

判明したところによれば、こいつは日本軍の特務隊から派遣された間諜だった。

奴らは自分たちの目的を容易に達成するためにこいつを徹底的に偽装させた。

それは間諜訓練を長い期間与えたのはもちろん、作男までさせて、遊撃隊と人民の目を欺こうとした。

こいつは遊撃隊の武装装備、活動地域、遊撃隊員たちの思想動向などを探知するために入ってきた奴だった。

しかしこいつは遊撃隊員たちの高い革命的警戒心のために自分の目的を達成することができなくなつたのはもちろん、かえって自分の正体が暴露される危険性が生じるや、逃走する機会ばかりうかがっていたのである。

実際我々がその時高い階級的自覚で武装せずに、鋭い洞察力を持たなかつたならば、敵の策動を適時に看破することはできなかつただろう。

普通の平凡な目で見たら、そいつの入隊初期の生活には大きなけちをつけるところはなかつた。

それはそいつが自分の正体を偽装するために他の人と同じように働き生活しながら、必要な時には危険の中に飛びこみもしたからである。

このように敵は奸悪で狡猾である。そのために我々は奴らの奸巧な手法を鋭く注視しなければならぬ。

今日南半部に巢食っている美帝国主義者たちとパク・チョンヒかいらいの徒党は、共和国北半部に対して間諜、破壊、暗害策動をいつそう露骨に敢行している。

我々はいつどんな環境の中でも、敵のいかなる狡猾な策動をも適時に摘発粉碎しなければならぬ。

我々はキム・イルソン同志の革命思想で徹底的に武装し、いつも緊張して動員された態勢で働きながら、最大の革命的警戒心を堅持することによって、キム・イルソン同志を首班とする党中央委員会を命を賭けて守り、人民の血汗でもって獲得された革命の戦取物を金城鉄壁のごとく守護しなければならない。

☆

敵を瓦解させて（第6巻第14話）

チエ・ヒョン

一九三三年九月ソウアンチョン遊撃根拠地のマチョンでキム・イルソン同志に初めてお目にかかつてからヨンギル県ペチェゴウ遊撃根拠地に帰ってきた私は、広範な人民大衆との活動ばかりでなく、反日部隊との共同作戦を強化することは我が革命の勝利の重要なかぎになるとおっしゃったキム・イルソン同志の教示を貫徹するために努力した。

我々はキム・イルソン同志の教示を指針にして反日部隊との活動はもちろん、偽満軍やさらには〈満州国〉傀儡警察に対する瓦解工作も進めた。

当時ヨンギル県ペチェゴウ遊撃根拠地の近くには一個中隊の偽満軍と傀儡警察分署、そして部落ごとに自衛団が常時的に駐屯していた。

これは我が遊撃隊の活動に障害となっていた。

ところが遊撃根拠地の歩哨所があるところから山一つ隔てたところにある警察分署の若い分署長は遊撃隊を非常に恐れていて、すっかりおじけづいて外に出るのもままならないでい

た。

このような実情から党組織では私にこの警察分署長を我々の側に引き入れるか、さもなければ中立化させよという任務を与えた。

私はそれ以前から面識のあるペチエゴウのある御者の老人とまず連携を緊密に結んだ。警察分署長はちょうど老人の息子の妻の兄弟に当たる人間で、いわば御者の老人の姻戚だった。私の計画は老人をよく教育して我々の側の人間にしてから、彼を通じて分署長に接近しようというものだった。

私はしょっちゅう御者の老人に会って革命的影響を与えながら、彼が革命の側に立つ日を待った。

ある日ペチエゴウに工作に出かけて帰ってくる途中で私は再び老人の家を訪ねていった。私はその家の部屋の中で思いがけず分署長とかちあった。

私が部屋の中に入るのを見るや、分署長と話をしていた老人は、座っていたその場からぱつと立ち上がった。私は最初は驚いた。

どうしようかと私は心を落ち着かせてしばし考えた。

（敵はたった一人だけだ。それも臆病な人柄だ。）

私は自信を持って彼を意のままにできると確信した。そしてモーゼルを抜いて持ったまま大股に入っていくって、分署長がまだ振り向かないうちに、「動くな！」と怒鳴った。

おびえて顔が真つ青になった分署長は、両手をさつと挙げてぶる震えた。私が銃を奪うや、分署長は手をこすりあわせながらどうか命だけは助けてくれと哀願するのだった。

「食つていくためにやっていることだから、わしに免じてでも赦してやってください。今後この男もあるいは革命に役立つかも知れません。」と老人も懇請するのだった。

私はこの機会に分署長を我々の側に引き入れようと考え、モーゼルを懐の中にしまつて笑いながら言った。

「あなたが我々に反対しないのに、なぜ我々があなたを攻撃しますか。我々遊撃隊は善良な人間は攻撃しません。ただ我が人民の敵であるウエノムとだけ戦う軍隊なのです。」

その時やつと分署長はちよつと安心したのか、震える声で訊くのだった。

「チェ隊長でしょうか？」

私は老人がだいぶ前にすでに私のことについて知っている通りに分署長にすつかり話したのだと分かった。

「私が遊撃隊にいるということをしつかり知りながら、なぜあなたは捕まえようとしなかったのですか？」

やはり笑いながら私が再び訊くと、彼は、「あなたたちが良いことをしているのに、助けることはできないまでも、どうして妨害などしましょうか。」と言つた彼の態度から見て、本心から言うことに違いなかった。

後に分かったことだが、老人は私から聞いた話を分署長にしてやりながら、命が惜しかったら人民や遊撃隊に誤った行いをしてはならないとしょっちゅう言い聞かせてくれていたのである。

「あなたは本当によく考えました。自分の土地をウエノムが強占したのに、若い青年として奴らと闘うことはできないまでも、我々に反対して闘う必要などないではないですか。」と言いながら私は遊撃隊が戦う目的の正当性について分かりやすく順々に話してやった。

我々が話している間に老人は鶏をつぶして酒膳を用意した。

私は固く断つたが、老人と分署長が勧めるので、飲む振りでもするしかなかった。

分署長はほろ酔い気分になると、自分もウエノムを憎んでおり遊撃隊を尊敬していると言いながら、どうか遊撃隊が自分たちの警察分署だけは傷つけないでくれと言うのだった。

酔いが回って彼の気分が非常に良くなった時、私は分署長に阿片をやるから弾を一箱だけ売ってくれと言った。

ところが分署長は、「ウエノムたちが知ったら大変だ」と言いながらそれは難しいと言っていた。

「あなたは何でもって遊撃隊を尊敬しているということを示してくれますか。」と私も厳格に言った。

するとしばらく考えてから分署長は弾を売ったという事実を秘密にしてくれとくれぐれも

頼んでからやっと承諾した。

もちろん遊撃隊に弾が貴重だったことは事実だったが、私に分署長から弾を買おうと思つたのはもう一つの意図があつてだった。

敵の偽満軍や傀儡警察は反日部隊とは違つて、民族的自覚を呼び起こすだけでは不足だった。彼らの弱点を利用することが必要だった。なぜならば、彼らは日帝の走狗機関で働いて食つているので、いつ敵の側で何かをしないと保証できなかつたからだつた。

そのため説得工作を主にして彼らに反日思想をたゆまず注入する一方、彼らに遊撃隊を助させることによつて日帝に対して罪を犯させることが必要だった。

このようにすればどんなことがあつても自分たちと連携を持つている遊撃隊を日帝の奴らに告発することはできない。

私が弾を買おうとしたのもまさにこのような目的を追求したのだった。

数日後に約束どおり警察分署長は老人を通じて弾一箱を送つてきた。

その後から私は老人と一緒に馬車に乗つて公然と警察分署を訪れることができたし、警察分署にいる五名の警察官とその傘下にある自衛団員たちをも我々の影響下に入れることができた。

警察分署が我々の影響下に入るや、遊撃隊はペチエゴウ地方で活動するのが容易になつたし、弾も容易に手に入れることができた。

我々はこのような経験に基づいて、警察分署からいくらも離れていないところにある偽満軍中隊の中隊長にまで影響を与えることを計画した。私はこの工作に、すでに我々と連携を持っていた偽満軍の分隊長を利用しようと考えた。

貧農出身の偽満軍分隊長は、以前に我々の捕虜となつて教育されて戻つていった人間だつた。

我々から教育された偽満軍分隊長はその後から暇さえあれば敵情を知らせてくれたし、偽満軍中隊内の指揮官や兵士たちの思想動態を我々に内通してくれた。

中隊長と彼の妻は阿片中毒患者で、遊撃隊の襲撃を受けるのが怖くて一時も安心できないでいるということ、そして表に出しては言わないが、中隊長が日本の指導官の奴らをそれほどどこころよく思っていないということなど、我々は偽満軍中隊の内部を筒抜けに知っていた。ある日偽満軍分隊長に、遊撃隊がちよつと会いたいと言つていたということを偽満軍中隊長に伝えてくれと申し送つた。

我々は偽満軍中隊長の卑怯性と民族的意識を考慮して直接談判しようと考えたのである。それから数日経つたある日の夕方だった。

私は私服を着たまま馬に乗つて、すでに我々と連携を結んでいた警察分署に行つて弾を手に入れて、馬の背中に積んで遊撃根拠地に帰るところだった。

私が山のふもとに差し掛かつた時、道端から急に偽満軍兵士五人が飛び出してきた。私は

とつさにモーゼルを引き抜いた。

ところが異常なことに彼らは私を銃で狙いもせず黙って並んで私の前をさえぎった。

(撃ち倒すべきか?)と私はしばしためらった。

しかし次の瞬間、こいつらを撃ち殺せば偽満軍中隊に対する工作が水の泡に帰すという考えが浮かんだ。

私が決心を下せないでいると、偽満軍の一人が不意に言った、

「私です。」

彼はほかでもない偽満軍分隊長だった。

「私らの中隊長殿が会おうと言うので、訪ねていったところです。一緒に行きましょう。」

私はどうしたらよいか分からなかった。

偽満軍分隊長の真剣な顔の表情から見て、何か奸計が隠されているようには思えなかったが、ともかく敵の中に、それも単身でためらいなく入っていくことはできなかったのである。

そうかといって彼らの提議を退けるのもできないことだった。もしも拒んで行ってしまう偽満軍中隊長は悪く考えるかも知れないではないか。そうなればほとんど成熟しかけていた偽満軍中隊長との関係が悪くなるかも知れなかった。

単独で彼らの中に行くというのも危険を覚悟せざるを得ないことだった。

しかし偽満軍中隊長が遊撃隊の指揮官をあえて害することはできないだろうという確信を

持つて私はすぐに彼らの後に従った。

偽満軍の中隊部に入ると、中隊長は飛び出してきて私を貴賓として迎えた。高級な絹の布団まで敷いた部屋に案内してから、彼はすでに準備しておいた食膳を持つてくるようにと言った。

「やがて豪華な食膳が運ばれてきた。

夕食を食べてから私は懐に入れて持ち歩いていた阿片を取り出しながら、「これは遊撃隊からのあなたとあなたの奥方への贈り物です。」と言った。

「私のような者に贈り物まで……」

「私たちは人民の便宜を図ってくれる中隊長のあなたについての話をたくさん聞いています。」

私がこのように言うと、彼はどうしてよいか分からないほど喜んで何度も頭を下げた。謝礼した。

私は夜遅くまで彼に話をしてやった。

我々の聖なる闘争目的の正当性について、そして国を奪われた人民は力を合わせて日本帝國主義を打ち倒さなければならないということと、我々とあなた方との間には互いに闘う必要はないし、遊撃隊は善良な人間を攻撃しないということについて話すと、彼は注意深く聞いた。

私の話が終わると、彼は、「遊撃隊のお蔭で私たちはこれから安心して暮らせるようになったのですから、何とお礼を言ったらいいのか分かりません。」と言いながら、今後遊撃隊を積極的に助けると誓うのだった。

その日遅く私は偽満軍の兵営から立ち去ろうとした。

一晩だけ泊まっていけと言った偽満軍中隊長は、私がどうしても帰ることになると、あたふたについて出てきて私に、「弾をやったら馬の背にまだ積むことができるか。」と自ら進んで訊くのだった。

私はもうこれ以上は積む場所がないと答えた。

偽満軍中隊長は何かしばらく考えてから急に言い考えが浮かんだのか、特務長を呼ぶのだった。

彼は特務長に弾四箱を遊撃根拠地の歩哨所のあるところまで積んで行ってやれと言いつけた。こうして偽満軍兵士十余名とともに私は四箱の弾を馬車に積んで遊撃根拠地に帰ってきた。

このように我々と偽満軍中隊長との最初の関係は結ばれた。

数日後に私が弾をもらった謝礼にいくらかの阿片を贈り物として持って彼を訪ねていった時、偽満軍中隊長は、

「明日の晩に我々を攻撃して倉庫を開けてください。我々は空に向かって空砲を撃ちますか

ら心配しないでください。今〈討伐〉のためにペクチョグにいる大隊部も空っぽですから、いちばんいい機会じゃないですか。」と提議するのだった。これは遊撃隊との関係を隠そうとするところにもその目的があつたが、重要なことは我々に送ってくれた以上の弾を補充してもらつて、今後も引き続き遊撃隊に弾を送つてやれるだけの量をもらおうということにあつた。

我々は彼の提議を快く受け入れてその次の夜の夜に偽満軍中隊部に攻撃をかけた。

彼らは約束どおり虚空に向かつて銃を撃ちながら遊撃隊と対戦しているように装つた。

我々が倉庫を開けて背のうに軍需物資を入れている時、偽満軍中隊長はペクチョグにある偽満軍大隊部に電話をかけた。

「今数百名の共産軍が不意に襲撃してきました。撃退する自信はありますが、弾が足りなくて大変です。至急送つてください。」

すると日本指導官と偽満軍大隊長は「武力支援はできないが、弾はいくらでも送つてやる。中隊が全滅することがあつても中隊部だけは堅持しろ。」とわめいた。

偽満軍中隊長は電話を切らずにしばらく待つてくれと言つてから受話器をわざと机の上に置いた。大隊部に銃声を聞かせるためだつた。

案の定日本指導官と大隊長は受話器からあわただしく響いてくるやかましい銃声を聞いて、慌てふためいてすぐに自動車に弾を積んで急いで中隊部に送つた。

しかし敵の自動車が中隊部に着いた時には、すでに我が遊撃隊員たちは古い背のう数個と使えなくなつた古い銃数丁を中隊部の周囲に散らばしてそこを去つた後だつた。

後に分かつたことだが、その次の日日本指導官が下りてきて、偽満軍中隊長が一名の兵士も死なさずに最後まで守り抜いたことに対して賞賛までしたということである。

こうして中隊長は我々に送つてくれた弾の補充を受けることができたばかりでなく、引き続き遊撃隊に弾を送ることができるようになつた。

その後も警察分署長や偽満軍中隊長は長い間引き続き遊撃隊との約束を忠実に履行した。

〈討伐〉がある場合には詳細にその内容を遊撃隊に知らせてくれたし、〈討伐〉に引張りが出された場合には自分たちの位置を我が遊撃隊に知らせてくれたし、空砲ばかり撃つた。

まさにこのように我々はキム・イルソン同志の教示に忠実に従つて、それ以後の時期にも引き続き偽満軍と傀儡警察、そして敵の自衛団に対する瓦解工作を成果的に進めることができた。

☆

